94

磯部檢三と加藤時次郎について

唐澤　信安，志村　俊郎，殿﨑　正明

日本医科大学 医史学教育研究会

（一）はじめに

日本医科大学の校史の中で，磯部檢三ほど謎の多い人物は少ない．

今回，小田原市国府津の郷土史家・奥津弘高氏の指導を得て，加藤時次郎の国府津の別荘及び，奥津氏の倉より，時次郎の購入品の食品等の「萬口取帳」が発見されましたので，改めて磯部と加藤時次郎について報告する．

（二）磯部檢三の生い立ち

磯部の旧宅にある自筆の記録に「明治5年10月3日．山口県厚狭郡埴生村（現山陽町）」の医師重枝化甫の三男として生を享けた．幼にして叔父磯部禎太郎の養子となる．不幸にして磯部は先天性右足股関節脱臼に罹患し，跛行となる．農耕に服する能わず．弱冠出でて，四方に遊学し，医師となり，東京に肆業（ほしいままの生活を）す」とある．

磯部は国府津の時次郎の別荘の思い出を次の如く記述している．『日本医学』第32号の「山田良叔先生を懐う」の一文の中に（医術開業試験後の静養時の報告で）「私は済生学舎に学んだことはありませんから，親しく（山田良叔）先生の講義を承ることは遂にありませんでした」と述べている．今日迄の日本医科大学の校史には，「磯部は済生学舎に学んだ」と記述してあるが，山根正次の書生をしながら同時に加藤の門人だった．

（三）磯部は新聞記者であった

「明治32年の春，私が千代田日報に筆を執っておりました時，当時の衛生局長・長谷川泰氏の衛生行政に，絶大な不平を鳴らしまして……」と磯部は自己の新聞記者生活の実態に触れている．

更に「磯部が日本医学校を創立した」と称する明治37年4月15日の10日前の加藤時次郎出版・磯部檢三編集の「直言」なる新聞がある．第5号に「余が直言の方針」磯部孔夏と題し1頁全面に，「社会の衛生問題・医事問題に触れた文章」が掲載されている．日本医学校の創立者たる者でなく，新聞記者だった．

（四）加藤時次郎は済生学舎出身医師

磯部を記者として認め，無政府主義者幸徳秋水の才能を認め，秋水が渡米の時，渡米費から生活費迄与え，未曾有の不祥事とされた「大逆事件」の責任者として秋水が絞首刑に処せられた後も，色々配慮した加藤時次郎とは如何なる人物かについて述べることにする．加藤時次郎は，安政5年1月1日，福岡県田川郡香春町に生をうけた．父は吉松元簡と称する医師であった．15歳の時父の勧めで長崎医学校で初歩のドイツ語を学び，20歳の時上京して警視庁裁判医学校に籍を置く．1年後に廃校となり，東京大学医学部予科3級に編入す．そこでドイツ人教師ランゲと教育上の問題で衝突し，退学となった．時次郎は直後長谷川泰の経営する「済生学舎」に入学し，明治16年（時次郎26歳）で3年間の勉学を終え医術開業後期試験に合格した．

加藤せんと結婚し，明治21年ドイツに留学し，エルランゲン大学でドクトルの学位を得ると共に，ドイツの社会主義を学んで帰国した．日本の貧しい人々を救う為に，銀座7丁目に加藤病院（後日，平民病院と改称）を造った．明治36年，日露戦争が始まる直前の事である．『萬朝報』の記者であった幸徳秋水・堺利彦・石川三四郎等は，社会主義的人道論から「反戦論」を激しく唱え，万朝報を退社した．その時，加藤時次郎は，反戦論紙『平民新聞』発刊の為，750円の資金を与えている．即ち社会主義保護者の役目をした人物である．又東京・横浜・大阪・名古屋等に「平民病院」「平民食堂」「平民法律相談所」等を作り社会の人々に生涯尽した人物である．

（五）その後の磯部檢三について

磯部は元来，同県人山根正次医学士の書生であった．山根と加藤時次郎は，長崎医学校時代からの友人で，磯部は山根に医学を，加藤に新聞を学んだ人物である．山根が日本医学校創立時には事務長役の幹事となり，磯部は文部省攻撃文を度々書き学校騒動となる．